

映画で考える 戦争と平和 / 第5回

『硫黄島からの手紙』授業ガイド

敵にも家族がいる —— 「『敵』の向こうにも、家族がいる。」

教員用・指導資料（対象：中学生以上）

本資料はAI（Claude / Anthropic）で作成しています。授業でのご利用前に事実関係をご確認ください。専門家の監修ではありません。授業での使用可否・場面の選択・学年の適否は、担当の先生が最終判断してください。

1 授業の概要

テーマ	敵にも家族がいる（相手を「敵」としか見ないことが、争いを続けさせるのではないか）
教材映画	『硫黄島からの手紙』（原題 Letters from Iwo Jima／2006年・アメリカ／監督：クリント・イーストウッド）
対象	中学生以上。映倫Gだが、戦闘による死傷・自決の場面など重い描写を含む（下記参照）
時間	標準100分（50分×2）。上映141分。厳選クリップ・あらすじ紹介を組み合わせる
中心概念	太平洋戦争末期と硫黄島の戦い／届かなかった手紙／視点の入れかえ（日米二部作）／相手を人として想像する
ねらい	敵・味方を問わず、兵士一人ひとりに家族と日常があったことを想像し、相手を人として見る視点の意味を考える
準備物	生徒用ワークシート（別PDF）／硫黄島の位置がわかる地図／便箋や付箋（手紙ワーク用・任意）

2 内容への配慮（必ずお読みください）

⚠ 戦闘・自決描写の扱い（重要）

日本の映倫はGですが、**戦闘による死傷、自決の場面**など重い描写を含みます。日本の戦争を扱うため、**家族や親族の戦争体験**を持つ生徒がいる可能性にも配慮してください。

- 上映は**場面を選んで**行う（手紙を書く場面、捕虜の母の手紙を読む場面など）。
- 太平洋戦争末期の状況と硫黄島の位置づけを**事前に補う**。
- 実在の人物を描いているが、**個々の場面には創作が含まれる**ことを伝える。
- 「玉碎」などの言葉を美化せず、**命が失われた事実**として扱う。発表は強制しない。

📄 レイティング・著作権について

- 日本の映倫はG。ただし配信版・ソフトにより表示が異なる場合があるため、使用予定の版をご確認ください。
- 授業での上映には教育機関向けの権利処理が必要になる場合があります。本教材の文章はすべてオリジナルで、ポスター・場面写真は使用していません。

3 硫黄島の戦い（予備知識）

どこで、何が起きたのか

硫黄島は、東京から約1200km南にある小さな島です。太平洋戦争の末期、アメリカ軍にとって本土空襲のための重要な拠点でした。**1945年2月19日～3月26日**、アメリカ軍が上陸し、激しい戦いになりました。日本軍は約2万人がほぼ全滅に近い形で戦死し、アメリカ軍も約6800人が戦死、負傷者を合わせると2万人を超えました。

届かなかった手紙

硫黄島の地下からは、戦後になって、兵士たちが書いた**届かなかった手紙**が見つかりました。映画は、その手紙を書いた人たちの日々を想像して描いています。

💡 「二部作」で視点を入れかえる

イーストウッド監督は、同じ戦いを**アメリカ側から描いた『父親たちの星条旗』**と、**日本側から描いた本作**の2本で映画にしました。アメリカ映画ですが、セリフはほとんど日本語です。特集「情報を見極める」第3回で『父親たちの星条旗』を扱っているので、組み合わせた授業もできます。

「敵にも家族がいる」を考える4つの視点（板書用）

① 手紙に書かれた日常

家族の健康、子どもの成長、庭の野菜。

② 敵の母の手紙

アメリカ兵の母も、同じことを書いていた。

③ 兵士である前に一人の人

パン屋、父親、オリンピック選手。

④ 命令と葛藤

命を粗末にする命令に、人はどう向き合ったか。

🎯 この授業の到達目標

硫黄島の戦いの概要を説明でき、映画の場面を根拠に「相手にも家族がいる」と想像することの意味を、自分の言葉で考えられる。

4 100分授業の流れ（50分×2）

時間	ながれ	先生の動き・発問
0-10分	導入	「戦地から家族に手紙を書くとしたら、何を書く？」と問い、手紙のイメージを持たせる。
10-20分	背景	地図で硫黄島の位置を確認し、戦いの概要と「届かなかった手紙」を紹介。
20-48分	映画を観る①	栗林中将と西郷が登場する場面、手紙を書く場面（クリップ）。
50-72分	映画を観る②	捕虜の母の手紙を読む場面など（厳選クリップ）。
72-90分	ワーク記入	手紙から見える「日常」と、「敵の母の手紙」から感じたことを書く。
90-100分	共有・まとめ	板書「『敵』の向こうにも、家族がいる。」で締める。

🌱 まとめ

戦争は、相手を「敵」という一つの言葉でくくることで続いていきます。でも手紙には、敵にも味方にも同じように、家族を思う言葉が書かれていました。「相手にも家族がいる」と想像する力は、争いを防ぐ小さくても確かな力です。

5 映画の背景知識

原題／邦題	Letters from Iwo Jima ／ 硫黄島からの手紙
製作年・国	2006年・アメリカ。上映141分。セリフはほぼ日本語。映倫：G
監督・製作	クリント・イーストウッド（製作にはスティーヴン・スピルバーグも参加）
受賞	アカデミー賞 作品賞など4部門にノミネートされ、音響編集賞を受賞。ゴールデングローブ賞 外国語映画賞
二部作	同じ戦いをアメリカ側から描いた『父親たちの星条旗』（2006年）と対をなす

主なキャストと役柄

- 渡辺謙（栗林忠道中将役）：冷静な指揮官でありながら、家族に絵入りの手紙を書く温かい父親の顔も持つ人物。
- 二宮和也（西郷役）：戦争に疑問を持ちながら生きのびようとする、パン屋だった一兵士。
- 伊原剛志（西竹一中佐・バロン西役）：1932年ロサンゼルス・オリンピック馬術の金メダリスト。

✉ 栗林中将の絵手紙

映画のもとになった資料の一つに、栗林中将が家族に送った絵入りの手紙をまとめた本『「玉砕総指揮官」の絵手紙』があります。戦地から幼い子どもたちに、やさしい絵と言葉を送り続けていました。

※上記の事実は公開情報（映画.com、Wikipedia等）をもとにしています。細部・脚色には諸説あるため、授業前に必要に応じてご確認ください。

6 発問例・見取りのポイント

Q. アメリカ兵の母の手紙を読んだ日本兵たちは、何を感じたと思う？

→ 「敵の母も同じことを書いていた」という気づきが、相手の見方をどう変えたかに注目させる。

Q. アメリカの監督が、日本兵の目から描いたことにどんな意味がある？

→ かつての「敵」の側に立つことで見えるもの。『父親たちの星条旗』との比較にもつなげる。

Q. 「相手にも家族がいる」と想像することは、争いを防ぐ力になる？

→ 賛否を問わず、根拠をもって考えさせる。現代の対立にも視点を広げる。

ワークシートの見取り（評価の観点）

- 兵士一人ひとりの日常や家族への思いを、映画の場面を根拠に読み取れているか。
- 敵・味方という区別を越えて、相手を一人の人として想像する視点を持てているか。
- 戦争を美化せず、失われた命の重さに目を向けて書けているか。
- 意見の発表は強制せず、書いた内容を尊重する（家族の戦争体験などに触れる生徒への配慮）。

7 シリーズ全体像

回	映画	テーマ	目安
1	1917 命をかけた伝令	一人ひとりの命の重さ	中学生～
2	西部戦線異状なし	戦争を美化しない目	高校生～
3	ダンケルク	生きて帰るという勇気	中学生～
4	シンドラーのリスト	一人の選択が命を救う	高校生～
5	硫黄島からの手紙	敵にも家族がいる	中学生～
6	ガンジー	暴力を使わずに社会を変える	中学生～
7	ブリッジ・オブ・スパイ	対話と交渉で争いを止める	中学生～
8	ホテル・ルワンダ	見捨てない勇気	中学生～

8 参考資料（主な出典）

硫黄島からの手紙 作品情報（映画.com） <https://eiga.com/>

Wikipedia「硫黄島からの手紙」 <https://ja.wikipedia.org/wiki/硫黄島からの手紙>

Wikipedia「硫黄島の戦い」 <https://ja.wikipedia.org/wiki/硫黄島の戦い>

作品：映画『硫黄島からの手紙』（2006年、監督クリント・イーストウッド）

© 2026 FilmEdu AI / 本資料はAIを活用して作成しています。授業でのご利用前に事実関係をご確認ください。専門家による監修ではありません。授業での使用可否・場面選択・学年の適否は担当教員の判断によります。作品の著作権は各権利者に帰属します。授業での上映には適切な権利処理（教育機関向けライセンス等）が必要になる場合があります。内容の誤りにお気づきの際はお問い合わせよりご連絡ください。